2025年8月3日　市川福音キリスト教会（詩篇139篇13～16節）

負けて勝つ

Ⅰコリント6章1～11節

はじめに

先週は齋藤五十三先生が「神の子どもに選ばれた恵み」と題して、エペソ1章3～6節から語ってくださいました。私たちに何か資格があったわけではなく、まったくの恵みで神の子どもとされたことを学びました。今日はⅠコリントに戻り6章です。先々週は5章の全体から「この世のものでない」と題して罪のパン種を取り除く姿勢を学びました。先回は、聖徒の交わりである教会の中において、正しくさばくことが語られたのですが、今日のところでは教会の中でのなすべきさばきが出来ず、世の裁判に訴えているありさます。

１、　信徒同士の日常の争い裁判に訴えるな（1～6節）

1～4節「あなたがたのうちには、仲間と争いを起こしたら、それを聖徒たちに訴えずに、あえて、正しくない人たちに訴える人がいるのですか。聖徒たちが世界をさばくようになることを、あなたがたは知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるのに、あなたがたには、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。あなたがたは知らないのですか。私たちは御使いたちをさばくようになります。それなら、日常の事柄は言うまでもないではありませんか。それなのに、日常の事柄で争いが起こると、教会の中で軽んじられている人たちを裁判官に選ぶのですか。」

「聖徒たちが世界をさばくようになる」とか「私たちは御使いたちをさばくようになる」というのは、世の終わりのことを指して言っています。後で出て来ますが、これは神の国を相続する者としてのあなたがたの驚くべき立場を知りなさいということです。

5章では、教会の中の淫らな行いをそのままにしていたことから、罪の問題に敏感にならなければいけないと厳しい指摘がなされました。教会の外のことについては神のさばきに委ね、教会の中のことについては教会の中でしっかり対応しなさいと教えたのです。

信徒同士に日常の事柄で争いがあるときに、教会の兄弟姉妹や、長老や執事に相談して祈ってもらって和解する。これがいいですね。淫らな行いが放置されている、というようなことに比べれば、おそらく些細なもめごとなのでしょ

う。しかし、それが出来なくて、「あえて、正しくない人たちに訴える人がいる」あるいは、「教会の中で軽んじられている人たちを裁判官に選」んでいるというのです。

少し前のところ、4章14節でパウロは「私がこれらのことを書くのは、あなたがたに恥ずかしい思いをさせるためではなく、私の愛する子どもとして諭すためです」と書きました。でもここでは堪忍袋の緒が切れたのでしょうか。

5～6節「私は、あなたがたを恥じ入らせるために、こう言っているのです。あなたがたの中には、兄弟の間を仲裁することができる賢い人が、一人もいないのですか。それで兄弟が兄弟を告訴し、しかも、それを信者でない人たちの前でするのですか。」

誤解のないように申しますが、パウロは教会の中の争いは教会の中で処理すべきであって、裁判所に訴えてはいけない、と言っているわけではありません。ここで問題なのは、教会内の日常の争いのようなことを教会らしく対応して解決することができないこと、そのような姿勢もないこと、そもそも起こらなくてよいような争いを起していることを問題にしているのです。

今日は7節の言葉を特に覚えたいと思いますが、これは信徒同士で訴え合っているコリントの教会に対するやや極端な忠告です。

２、　訴え合うことがすでに敗北（7～8節）

7～8節「そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。どうして、むしろ不正な行いを甘んじて受けないのですか。どうして、むしろ、だまし取られるままでいないのですか。それどころか、あなたがた自身が不正を行い、だまし取っています。しかも、そのようなことを兄弟たちに対してしています。」

「敗北」と訳された言葉は、損失、失敗、欠点などの意味です。そして訳出されていませんが、その前に「完全な」という副詞がついてますから、直訳すると「互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの完全な敗北です」となります。

それにしても、この言い方は極端だと思います。「不正な行いを甘んじて受け入れる」とか「だまし取られるままでいる」のでは、悪を野放しにして、悪を助長してしまうのではないかと思われるかもしれません。実際そうでしょう。特に、誰か別の人が受けている不正な行いを見過ごしてはいけません。だまし取ってはならないというルールが守られなければなりません。

しかし、不正を行わず、だまし取らず、不正な行いを甘んじて受け入れ、だ

まし取られるままに、それを受け止めるという生き方が身についているなら、そもそもそんな争いは起こらないのです。クリスチャンの基本が出来ていないのです。

主イエスはこのように教えられました。

マタイ 5 章 39～42 節「しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい。あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着も取らせなさい。あなたに一ミリオン行くように強いる者がいれば、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。借りようとする者に背を向けてはいけません。」

また、このように祈ることを教えられました。「私たちの負い目をお赦しください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します。」（6 章 12 節）

彼ら自身が不正を行い、だまし取っていて、しかも、それを訴え合っている。これではパウロの堪忍袋の緒も切れます。

正しいルールが守られること、それぞれ自分の権利が守られること、それは大事です。しかし、目には目を、歯には歯をではなく、神が神に逆らう者たちのために、その罪を負って死んでくださったのです。罪の問題の解決のために、神は十字架という方法を取られたことにより、私たちは救われました。このキリストの生き方に少しでも近づく私たちでありたいと思います。

３、　神の国の相続者（9～11 節）

9～11 節「あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫する者、男娼となる者、何色をする者、盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」

「あなたがたは知らないのですか」とパウロは繰り返しています。2 節、3 節、9 節、6 章ではこの後さらに 3 回も出て来ます。

「あなたがたは知らないのですか」というこの言葉は、悪いこと、ネガティブなことではなく、ポジティブなこと、驚くべき恵みを知りなさいというところで使われています。2 節、3 節では神の聖徒たちは、神と共に終わりの日に世界をさばくことになる。御使いをもさばくようになるという驚くべき立場が与えられていることを「あなたがたは知らないのですか」と使われています。

ここ 9 節では、10 個の悪徳についてではなく、もう早、「主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められ」、神の国の相続者であることを「あなたがたは知らないのですか」と言っています。

「洗われ、聖なる者とされ、義と認められた」とは、心に信じ、口で告白し、洗礼を受けたことを指しています。皆さんも洗礼のことを思い起こしてください。私は 1978 年 8 月 13 日に 20 歳で洗礼を受けました。生まれたときから教会に通い、高校 2 年生くらいから相当に準備して、と言っても洗礼準備会をしっかり受けたことはないので、礼拝や伝道集会やキャンプや、さまざまな機会に説教を聴き、自分でも、友人たちとも聖書を読んで準備しました。

その中から 3 つのことをお話ししたいと思います。まず高校時代に牧師先生の家で聞いた話は、お猿の赤ちゃんが一所懸命お母さんのおなかにしがみついているけれど、危ないときはお母さんがしっかり手をまわして落ちないようにしている。自分でしがみついているつもりでも、それ以上に神が守ってられる、という話はよくわかりました。

大学に行くとき、病気で療養していた大叔母に挨拶に行った時、大叔母は「どこに行っても自分がクリスチャンだと最初に言いなさい」と言われました。私にとっての洗礼はクリスチャンとして生きて行くという決意表明でした。洗礼を受けて聖餐式に与り、神の家族に加えられたと安心しました。

洗礼が罪の自分に死んでイエスキリストいのちに生きること、キリストのからだである教会に加えられること、それは分かっていましたが信仰生活を続ける中で、だんだん深くわかって来ることでした。

神学校で洗礼について学んだ時にも新たな発見がありました。それは洗礼が按手であり、キリストに生涯をささげる誓いだということです。それは考えてみれば当たり前のことなのですが、私は洗礼を受ける時には、そこまでは考えていなかったので、後から考えて、そういうことだと納得しました。

私は、「あなたは知らないのですか」と繰り返し、神さまから語りかけられて、そのつど、そうでした。そのことがわかっていませんでした。とクリスチャンであることの恵みと神の国を相続した特権を理解してきました。

洗礼は早く受けられた方がいいです。洗礼を受けた後の人生をなるべく長く地上で過ごすことは恵みです。

おわりに

「負けて勝つ」という言葉がありますが、十字架はその究極の例であると思います。「負けて勝つ」のは小手先の策ではなく生き方が現れるところです。